

【使徒書日課】エフェソの信徒への手紙 5章1～5節

¹あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい。²キリストがわたしたちを愛して、御自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとしてわたしたちのために神に献げてくださったように、あなたがたも愛によって歩みなさい。³あなたがたの間では、聖なる者にふさわしく、みだらなことやいろいろの汚れたこと、あるいは貪欲なことを口にしてはなりません。⁴卑しい言葉や愚かな話、下品な冗談もふさわしいものではありません。それよりも、感謝を表しなさい。⁵すべてみだらな者、汚れた者、また貪欲な者、つまり、偶像礼拝者は、キリストと神との国を受け継ぐことはできません。このことをよくわきまえなさい。

【福音書日課】マタイによる福音書 19章13～30節

¹³そのとき、イエスに手を置いて祈っていただくために、人々が子供たちを連れて来た。弟子たちはこの人々を叱った。¹⁴しかし、イエスは言われた。「子供たちを来させなさい。わたしのところに来るのを妨げてはならない。天の国はこのような者たちのものである。」¹⁵そして、子供たちに手を置いてから、そこを立ち去られた。

¹⁶さて、一人の男がイエスに近寄って来て言った。「先生、永遠の命を得るには、どんな善いことをすればよいのでしょうか。」¹⁷イエスは言われた。「なぜ、善いことについて、わたしに尋ねるのか。善い方はおひとりである。もし命を得たいのなら、掟を守りなさい。」¹⁸男が「どの掟ですか」と尋ねると、イエスは言われた。「『殺すな、姦淫するな、盗むな、偽証するな、¹⁹父母を敬え、また、隣人を自分のように愛しなさい。』」²⁰そこで、この青年は言った。「そういうことはみな守ってきました。まだ何か欠けているのでしょうか。」²¹イエスは言われた。「もし完全になりたいのなら、行って持ち物を売り払い、貧しい人々に施しなさい。そうすれば、天に富を積むことになる。それから、わたしに従いなさい。」²²青年はこの言葉を聞き、悲しみながら立ち去った。たくさんの財産を持っていたからである。

²³イエスは弟子たちに言われた。「はっきり言うておく。金持ちが天の国に入るのは難しい。²⁴重ねて言うが、金持ちが神の国に入るよりも、らくだが針の穴

を通る方がまだ易しい。」²⁵弟子たちはこれを聞いて非常に驚き、「それでは、だれが救われるのだろうか」と言った。²⁶イエスは彼らを見つめて、「それは人間にできることではないが、神は何でもできる」と言われた。²⁷すると、ペトロがイエスに言った。「このとおり、わたしたちは何もかも捨ててあなたに従って参りました。では、わたしたちは何をいただけるのでしょうか。」²⁸イエスは一同に言われた。「はっきり言うておく。新しい世界になり、人の子が栄光の座に座るとき、あなたがたも、わたしに従って来たのだから、十二の座に座ってイスラエルの十二部族を治めることになる。²⁹わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子供、畑を捨てた者は皆、その百倍もの報いを受け、永遠の命を受け継ぐ。³⁰しかし、先にいる多くの者が後になり、後にいる多くの者が先になる。」

「子供たちを来させなさい」【こども説教のために】

日曜日の教会の真ん中、礼拝堂の一番前は、子どもたちのために空けておきました。そこは、子どもたちのための場所です。「子供たちを来させなさい」と、主イエスがお招きくださっているのです。子どもたちは皆、そこで主イエスに手を置いていただき、祈っていただきましょう。

主イエスの御姿が見えなくても、問題ありません。姿が見えなくても、主イエスはここにいらっしゃる。聖餐桌の置かれている礼拝堂にいらっしゃいます。聖餐桌は、「主の食卓」です。主イエスがパンを裂いてお与えくださり、杯を回して飲ませてくださる食卓です。そのパンを受ける者は、主イエスの御体と一つにされています。その杯から飲む者は、主イエスの約束を受け継いでいます。その人たちは、主イエスと一つなのです。その人たちの姿の中に、わたしたちは、主イエスを見ることができるのです。

子どもたちを招いて、主イエスに代わって言いましょ、「**天の国はこのような者たちのものである**」と。天の国は、子どもたちのものです。すべての子どもたちのものです。すべての「神の子どもたち」のものです。

年齢が子どもである者だけではありません。わたしたちは皆、大人も子どもも、「心を入れ替えて子供のようにならなければ、決して天の国に入ることはできない」(マタイ 18:3) のです。皆、主イエスがお招きくださる「神の子どもたち」にならせていただきましょう。「神の子どもたち」として皆の真ん中に立たせていただき、手を置いて祈っていただきましょう。

何か必要なものがあるわけではありません。たくさんものを持っている必要もありません。むしろ、何も持たないで、本当に小さな子どものようになって、わたしたちは皆、主イエスの前に立たせていただくのです。天の父は、ご自分の子らに、必要なものを十分にお与えくださるでしょう。

「まだ何か欠けているでしょうか」

わたしたちの教会の属する日本基督教団が10月第1日曜日を「世界聖餐日」として記念するようになって、今年で80回目となります。第二次世界大戦終結の翌年、1946年に「世界基督教連合会」（世界教会協議会の前身団体）が世界中の教会に「世界聖餐日」の記念を呼びかけたのに応じて、日本基督教団も当時の教団統理の名で全教会にこれを記念するよう通達がされたのです。

聖餐は、教会の一致のしるしと考えられてきました。かつては、教派が異なれば一緒に聖餐にあずかることは決してなかったのです。今でも、相互の交流をしながら、聖餐に共にあずかることができない関係の諸教派教会があります。それでも、聖餐は、教会の一致を表すしるしです。教会が、どのような者たちの集まりであつても、ただ主イエス・キリストと結ばれた者たちという一点では共通した者たちの集まりであるからです。

教会は、主イエス・キリストと結ばれると信じて洗礼を授けます。洗礼を授けられた者は、聖餐にあずかることを通して、主イエス・キリストと結ばれた者であると確かめます。

もちろん、こう問われる方もあるでしょう。聖餐にあずかれるのが洗礼を受けた者だけなのならば、聖餐はむしろ、教会の一致ではなく分断を生じさせているのではないかと。確かに、教会の交わりには、まだ洗礼を受けていない方も招かれ、加わられています。教会は、むしろ、そのような洗礼を受けていない方を歓迎するでしょう。そのような方に向かっても、「神の子ら」と呼びかけるかもしれません。ところが、聖餐が始まると、途端に、「パンと杯にあずかれるのは、洗礼を受けている者だけ」と言うのです。信者がパンと杯にあずかっている間、ただ黙って待たされるというのは、確かに堪ったものではありません。大勢の中で自分だけが排除されているような思いを抱かれる方があつても、当然でしょう。ですから、ある教会では、日曜日の礼拝がひとまず終わった後に、信者だけが残って聖餐の式をあらためて行う、という方式を取っているところもあると言います。

それでも、わたしは、聖餐のパンと杯を取ることでできない方にも、そこにいていただきたいと思います。このパンと杯が、その方のためにも用意されていることを、知っていただきたいからです。聖餐の食卓が、すべての人に開かれたものであることを、知っていただきたいからです。そして、一日も早く、洗礼の恵みにあずかり、キリストと結ばれた者になっていただきたいのです。

洗礼は条件ではありません。洗礼を受けるのに、何か条件があるのでもありません。「わたしには、まだ早い」。いいえ、もう主イエスのもとに招かれて来られているのですから、少しも早すぎることはないのです。

「何もかも捨てて…」

「子供のようにになりなさい」と、主イエスは言われます。何者でもない子ども、何も持たない子ども、です。

それを妨げているのは、わたしたち自身です。わたしたちの多くは、すでに多くを持ちすぎているのです。わたしたちが持つものは、財産とは限りません。能力も、努力した結果も、考えも、熱心さも、プライドも、ありとあらゆるものを、わたしたちは、自分自身のものとして保とうとするものではないでしょうか。いいえ、そういうものそのものよりも、わたしたちは、自分自身というものを多く持ち続けたいと、熱心に追い求めているのかもしれない。

わたしたちが自分自身を持つというのは、大切なことなのでしょう。アイデンティティと言う言葉があります。自分が何者であるのかということ自分を自分で知り、納得できるとき、人は、自分というものを確立できるのでしょう。それは、自立した人間となるために、必要なことです。自立した人間として、主体的に責任ある行動を取るようになるためにも、必要なことです。

けれども、それは、ときに、自分と他の者との間に深い溝を生じさせるものとなることもあるかもしれません。越えられない壁を築いてしまうことがあるのかもしれない。

金持ちの青年は、「もし完全になりたいのなら…」という言葉聞いて、**悲しみながら立ち去りました**。たくさんの財産を持っていたからです。いいえ、彼が持っていたのは、財産だけではありません。神の掟を守る意志も、能力も、持っていました。あらゆる点で優等生でした。それを捨てて主イエスに従うことが、できませんでした。

「わたしたちは**何もかも捨ててあなたに従って参りました**」と弟子たちは言います。けれども、弟子たちの教会では、皆がすべての財産を捨てて教会に加わったわけではありません。皆が子どものように与えられるものを待つだけの者になったわけではありません。「自分」を捨てて、「主イエス」と結ばれたものになったのです。主イエスと結ばれた「神の子」として生きようになりました。わたしたちは皆、「自分」ではなく「キリスト」を、「自分」ではなく「神の子」を、自分のものとして生きようになったのです。

使徒パウロは、「あなたがたは神に愛されている子供ですから、神に倣う者となりなさい」と勧めます。何よりも、悪い言葉を口にしないように、と勧めます。わたしたちの「自分」の中から出てくる言葉は、悪いのです。「神の子」にふさわしい言葉を身に着けるために、沈黙することも必要です。

命のパンにあずかりましょう。主の御体にあずかり、「神の子」にふさわしい者として養い育てていただくのです。